

令和 6 年 5 月 16 日現在

機関番号：12101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20015

研究課題名（和文）イギリス・ロマン主義時代における文学と美術の領域的横断性 B. R. ヘイドンを中心に

研究課題名（英文）The intermediality of literature and art in British Romanticism: B. R. Haydon and his contemporaries

研究代表者

岩本 浩樹（Iwamoto, Hiroki）

茨城大学・人文社会科学部・講師

研究者番号：20961816

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：イギリス・ロマン主義時代における文学と美術の領域的横断性に関して実証的な研究をおこなった。ウィリアム・ワーズワスの意味深長な措辞の再解釈や、ジョン・キーツの詩における当時の美術作品からの影響、また、B・R・ヘイドンを軸とした文芸サークルの活動実態とその意義などについて、一次資料の丹念な渉猟や未発表資料の紹介を交えて、多面的に論じた。その結果は、（刊行予定のものを含めれば）3本の論文、および4件の口頭発表として形にされた。研究成果は日本国内のみならず、海外においても客観的な学術評価を得ているものが多い。有意義な研究資金援助を受けたことをここに報告する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、ひとことでいえば、長らく等閑視されていた数多くの一次資料の読み込みを踏まえた堅固な論証にもとづき、当該学術分野における今後のさまざまな道しるべとなりうる方向性を示した点にある。具体的には、ワーズワスの措辞に関する研究においては、一世紀以上にわたる和訳の歴史における根本的な問題点を指摘し、新たな観点からの別の訳語を提言したことで、より精密な作家像の認識に繋がりうる成果を発表した。また、ヘイドンが当時の文芸サークルにおいて果たしていた役割の意義の重大さに初めて本格的に目を向けることで、この時代の文化的ダイナミズムの諸相がさらに浮かび上がる結果となった。

研究成果の概要（英文）：This research focused on the intermediality of literature and art in British Romanticism. It proposed a new interpretation of William Wordsworth's nuanced phraseology, drew attention to some contemporary artworks as potential new sources for John Keats's poetry, and discussed the significance of B. R. Haydon's literary-artistic circle. I also used and benefited from some unpublished material. The results were presented in the form of three articles (two of which are to be published) and four oral presentations. My research findings have been well received both in Japan and abroad, and I am sincerely grateful for this research grant.

研究分野：イギリス文学

キーワード：ロマン主義 姉妹芸術 エクフラシス ウィリアム・ワーズワス ジョン・キーツ ベンジャミン・ロバート・ヘイドン ジョシュア・レノルズ ロイヤル・アカデミー

1. 研究開始当初の背景

イギリスではとりわけ 18 世紀から 19 世紀初頭にかけて、諸芸術の共鳴性についての議論が高まりをみせた。いわゆる「姉妹芸術」(the sister arts)として扱われたのは詩と絵画ばかりでない。音楽や彫刻、建築、ときには弁術もその範疇に含まれた。世紀の転換点にロマン主義文芸が最盛期を迎えると、作家間や芸術家間の創造的交流は以前にも増して活発なものとなった。かつては、ロマン主義時代の作家という、どこか「独り善がり」ないしは「世俗からの孤高」のようなイメージが付きまとう時代もあった。しかし、近年の研究では、この見方が修正されている。すなわち、ロマン主義時代の著述業 (authorship) とは、ひとえに単独の個人にのみ帰せられるものでなく、むしろ所与の集団における相互的な影響力、そして場合によっては文化領域をも横断した同志による協調 (collaboration) を旨としていた可能性が強く指摘されている。ロマン主義時代における文芸の領域的横断性に関しては、近年、モリス・イーヴズ (Morris Eaves) が *The Cambridge Companion to British Romanticism* (2010; 2nd edn) に寄稿した論文のなかで重要な提言をおこなっている。‘The Sister Arts in British Romanticism’ と題した論考において、イーヴズはまず、これまで幾多もの評家がこの時代の文学作品におけるさまざまな美的要素に着眼してきた事実を指摘する。しかし、イーヴズが続けるところによれば、長年にわたり、どこか表層的で概念的な考察はいくつも公刊されてきたいっぽうで、文化的交流の個別の実態に迫る領域については、いまだ研究の手が入っていない場合が多い。つまり、「ロマン主義」という大きな括りに縛られて時代相を理解するのではなく、個々の文化的ダイナミクスの実態に応じて、その特徴を明らかにする態度がいま求められているのである。こうした理由から、本研究では、伝統的に「ロマン主義」と称される時代において、文学と美術の領域的横断がいかなる生成と発展の軌跡を見せたかを実証的に論ずる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近年どこか細分化が進んでいるロマン主義研究において、文学と美術という領域同士の横断性に着眼し、両者の本質を新たに橋渡しする知見を示すことである。具体的には、ロマン主義文芸における「画家」ベンジャミン・ロバート・ヘイドン (Benjamin Robert Haydon, 1786-1846) の「文学的」重要性に対して、さらなる学術的関心を引きつけようとするものである。ヘイドンは画家でありながら、同時代の文人の多くとも交流していた。本研究の問題意識とは、ヘイドンの存在がこれまで想定されてきた以上に、ロマン主義時代における文芸ネットワークの重要な基軸のひとりとして機能していたのではないかと、という点である。言い換えれば、ヘイドンを起点として、ロマン主義の学術的な地図を部分的に再構成することが本研究の目標である。ヘイドンに関する本格的な研究は、日本はもとより本国イギリスでも決して多くない。本研究の独自性と価値は、彼の未発表手稿を含む、数々の希少な一次資料の発掘と精査に裏打ちされた実証的なアプローチにある。これは、主に文化的・歴史的・美学的な観点から、ヘイドンがいかに文学と美術という異領域の交差を積極的に促そうとしたかを検証するものである。

はたしてヘイドンはロマン主義時代において、どの程度まで異領域同士の創造的な交わりを促したと推察されるのか。その意義と実相を明らかにすることが、本研究における最大の課題である。たとえば、18 世紀中葉にロンドンにはロイヤル・アカデミー (The Royal Academy of Arts) が設立され、ジョシュア・レノルズ (Joshua Reynolds, 1723-92) が初代院長を務めた。レノルズがロイヤル・アカデミーでの講義で説いた内容には、絵画のジャンル区分における歴史画 (history painting) の階層的優位、また、画題選定における文学の重要性といった論点が含まれていた。ただし、当時のイギリス画壇で商業的に成功するためには、歴史画よりも肖像画 (portraiture) に特化すべきことは自明であった。レノルズ自身、結局は肖像画家として名を馳せることになる。つまり、理想ではなく現実をとったというわけである。一方で、商業的現実を顧みずに、画家としての栄誉という理想を追求したのがヘイドンである。換言すれば、ヘイドンは、およそ不首尾に終わったレノルズの理想論を完遂すべく、19 世紀初頭のイギリスに立ち上がった人物として位置づけられる。さらに、レノルズの理想論のなかには、詩画の本質的な共鳴に関わる言明も含まれていた。レノルズのこの観点をヘイドンがロマン主義時代において復興しようとした意義は見直されてよい。ヘイドンと厚い友情関係にあった詩人ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) のみならず、時代を代表する作家ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) に関しても、ヘイドンがその執筆活動に及ぼした美学的影響を推し量る価値は充分にある。ヘイドンとワーズワスとは、多少の年齢差こそあれ、互いに一定の敬意をもって接していた。ヘイドンはワーズワスの肖像画をいくつも描き、ワーズワスもまたヘイドンに寄せる複数の詩を書いた。

こうした領域的横断性に関わるヘイドンの意義については、当該分野に関する最近の研究、たとえば、ソフィー・トマス (Sophie Thomas) の *Romanticism and Visuality: Fragments*,

History, Spectacle (2008) やソーラ・ブライロウ (Thora Brylowe) の *Romantic Art in Practice: Cultural Work and the Sister Arts, 1760-1820* (2019) などでもどこか軽視されている。本研究は、文学と美術の創造的交流における未開拓の領域に本格的かつ実証的な調査の手を入れようとしている点で独自性があり、また、ロマン主義の学問的な地図における新たな基軸としてヘイドンの存在の意義を提示する点において創造性を備えている。

3. 研究の方法

本研究のアプローチは実証的なものである。すなわち、二次文献の渉猟はきめ細かくかつ広い視野でおこないつつ、それ以上に、一次文献の徹底的な調査と読解を軸とした手堅い手法をとるということである。文化的・歴史的・審美的な観点から、時代の実態に具体的に迫る。主要な論考課題としては、まず、レノルズらによって打ち出された 18 世紀イギリス美学の理念を、ヘイドンがどのように受容し、また、その後のロマン主義時代においてどのように発展させようとしたかという程度を見定めることがある。そしてまた、同時代の定期刊行物のうち、文芸の両面に力を入れていたもの（たとえば *Annals of the Fine Arts* (1816-20)）を取り上げ、その談話内容とヘイドン自身の美学思想との接点を探ることも求められる。いずれの場合も、未発表手稿を含む数々の一次文献をもとに、ヘイドンを中心とする創造的な文芸ネットワークの拡がりを検証することを最終目的とする。

4. 研究成果

全体として、まず、研究期間内に公刊された論文は 1 本（日本語）だけである。しかし、同研究期間内に受理され、令和 6 年度中に出版される予定の論文は 2 本（いずれも英語）ある。また、日本語論文は大学紀要に掲載されたものであるが、英語論文はいずれも、イギリスの出版社から査読付きで刊行される、高い客観的評価を得たものである。次に、研究期間内でおこなった学術口頭発表は 4 件ある（日本語 2 件と英語 2 件）。うち 2 件は招待を受けたものであり、そのうちの 1 件は海外（ポーランド）で開かれた大規模な国際学会でのシンポジウムにおける発表である。

具体的には、刊行済みの論文では、ワーズワスによる措辞の特徴とその日本語訳の歴史および妥当性に関して、実証的な研究成果を発表した。長らく学者内では人口に膾炙していた語句のひとつを取り上げ、その和訳の歴史を丹念に辿ったうえで、根本的な再解釈の必要性を指摘した。最終的には新たな訳語の提言をおこない、論述の方向性自体がロマン主義文学研究における新たな道しるべとなりうる可能性を示唆した。また、4 件の口頭発表においては、ヘイドンがときの文芸サークルの発展において果たした役割を歴史的に論じたり、同時代の詩人キーツの作品における当時の美術作品からの影響を指摘したりした。いずれも、未発表の手稿からの引用や長らく等閑視されていた資料からの発見内容を含む、学術的意義の高いものと位置づけられる。

総じて、ロマン主義時代のイギリスにおける文学と美術の領域的横断性を多面的に検証することができたことをここに報告する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 岩本 浩樹 | 4. 巻 2 |
| 2. 論文標題 ワーズワスの 'wise passiveness' の再解釈 新たな訳語の提言（イギリス・ロマン主義の詩における 予弁法に関する覚書とともに） | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要 人文社会科学論集 | 6. 最初と最後の頁 23-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34405/0000020244 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件／うち国際学会 1件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 Hiroki Iwamoto |
| 2. 発表標題 Reynolds Redivivus: B. R. Haydon's Creation of Taste in Romantic England |
| 3. 学会等名 A Guide to Studies in English Romanticism: New Perspectives（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Hiroki Iwamoto |
| 2. 発表標題 Aesthetic Transplantation: The Royal Academy, Sir Joshua Reynolds, and Benjamin Robert Haydon |
| 3. 学会等名 April Conference Fifteen: Humanity/Humanities（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 岩本 浩樹 |
| 2. 発表標題 1817年のオックスフォード 「ハイピリオン」とキアロスクーロの芸術 |
| 3. 学会等名 イギリス・ロマン派学会 第49回全国大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1．発表者名 岩本 浩樹 |
| 2．発表標題 黄昏の豎琴 イギリス・ロマン派における抒情の命脈とジョン・キーツ |
| 3．学会等名 第24回英詩研究会シンポジウム（招待講演） |
| 4．発表年 2024年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| | | | |
|--------|---------------------------|-----------------------|----|
| 6．研究組織 | | | |
| | 氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号） | 所属研究機関・部局・職 （機関番号） | 備考 |

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|